

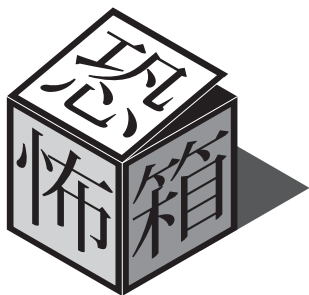
恐怖箱

怪萌

高田公太
雨宮淳司 著
加藤一



竹の子書房文庫



怪萌

か い も え



高田公太
雨宮淳司
加藤一

著



竹の子書房文庫

※本書に登場する人物名・団体名・描かれている内容は架空のもので、
において現代では若干耳慣れない言葉・表記・表現が登場する場合がありますが、
これらは差別・侮蔑を意図する考えに基づくものではありません。

イラスト 漆原密花

巻頭言

箱詰め職人からのご挨拶

加藤 一

本書『恐怖箱怪萌^{かいもえ}』は恐怖箱作家の俊英による、萌える怪談を集めた作品集である。

恐怖箱とは、竹書房文庫で展開されている実話怪談群である。最強怪談著者発掘大会・超・1から選り抜かれた生え抜きの作家群——恐怖箱作家によって描かれる実話怪談は、彼らが心血と精神の安寧をかなぐり捨てて市井から拾い集めた、終わりのない現代実話怪談全集なのである。

と、そんな話はさておき。

本書は恐怖箱作家群による、萌え怪談集である。

お兄ちゃん、妹、メイドカフエ、キス。

恐怖として語られる忌み言葉から最も遠い甘い言葉。

そうした言葉を駆使して、語れる恐怖の………、

いや、萌えて萌えて悶え死ぬような怪談。

狂気——じゃなくて、好奇。

気絶——じゃなくて、悶絶。

失禁——じゃなくて、近親。

怪談は今、禁断の〈萌え〉の扉に手をかける——。

怪萌 目次

4 巻頭言

加藤 一

8 はむはむ

神沼三平太

9 はむはむ²

寺川智人

10 見ちゃらめえ！

寺川智人

11 妹に見えるのに

高田公太

12 夜にしか逢えない

神沼三平太

13 私お兄ちゃんの隣がいい

14 俺のシユミ

15 キスしてあげようか？

16 てへへ霊少女 ミソギ 高田公太

17 ゴスロリでも可愛いよ

18 メイドカフェ再襲撃

33 ぼくは小さい胸が好きなのです

34 お兄ちゃんのバカア

はむはむ

神沼三平太

Kが小学生の頃の話である。

「ねえ」と若い女性の声が出た。きよろきよろ見回したが、誰もいない。

「ねーえ？」甘えたような声が出た。

逃げようとする、全身の力が抜けた。

耳元を何か柔らかいもので挟まれていた。熱い息づかいが聞こえた。

続いて「お姉さんと一緒に来て」と声が出たという。

2 はむはむはむ

寺川智人

朝、けたたましく鳴る目覚ましを止めて再びまどろみに落ちそうになる。

すると耳元にふうつと吐息を吹きかけられる。ほんのりと甘い香り。

そして次の瞬間、耳たぶが甘噛みされる。何度も、はむ、はむ、と。時折舌先が耳たぶに当たる。いや、これはわざとだろう。

堪えきれずに目を覚めますが、誰もいない。

見ちやらめえ！

寺川智人

尿意にせかさされてトイレに入ると先客がいた。

洋式便座に座っている、パジャマ姿でツインテールの女の子と目が合う。

「見ちやらめえ！」

少女に叫ばれて慌てて扉を閉めるが、ここは俺の家だ。もう一度扉を開けると、そこには誰もいない。翌朝、再びトイレに入るとまた先客がいた。

「見ちやらめえ！」

妹に見えるのに

高田公太

「お兄ちゃんのバカア！」

海水浴から戻るなり、玄関先で妹に怒られた。

「もう、海行きたかったのに！どうして起こしてくれなかったのさあ！」

「ワリ。気持よさそうに寝てたし……頬を膨らます妹。それに、その水着の女の人なんなのお！？あたしにあてつけ？」

妹が指指す後方を見たが誰もいなかった。

夜にしか逢えない

神沼三平太

墓地を歩いていると、すぐ後ろから同じ歩調で歩く音がする。不意に止まると足音も止まる。

後ろから「まだ来なくていいのに」と声がした。

「もうひと月経ったよ」

と言つて振り返るが、姿が見えない。

「まだ夜しか出られないの」

そう残して気配が消えた。

夜、出直すと、生前の姿のまま墓前に出たという。

私お兄ちゃん
の隣がいい

俺のシユミ

キスしてあげようか？

てへへ霊少女 ミソギ 高田八太
第一話 「私お兄ちゃんの隣がいい」

ゴスロリでも可愛いよ

メイドカフェ再襲撃

深川拓

「ステージの隅っこのほうから、焦げ臭い匂いがしてくるんです」

舞美さんがそう話すと、千波さんは眉をひそめた。やっぱり黙っていたほうが良かったかな、と舞美さんは一瞬後悔した。

彼女たちが勤めるメイドカフェでは連日イベントが開催されており、そのためのステージが用意されている。

歌や踊り、ちよつとした芝居などを披露しているとき、

ご主人様たちとゲームに興じているとき、ふとした拍子に異臭に気づくことがあった。

舞美さんが驚き視線を厨房のほうに送っても、そちらの人々は気に留める様子もない。鼻の粘膜を刺激するような異臭も、そちらからは漂ってこなかった。

訝いぶかって、もういちど先刻の方角に顔を向けると、思わず鼻をつまみたくなるほどの炭素臭に襲われた。

「あんまりみつともない顔したから、ちようど一緒にゲームをしていたご主人様に心配されちゃいました」

へろ、と舌を出す舞美さんに、千波さんは眉をひそめる。

「でも、それだけじゃないんです。他にも、ロッカールームのほうから物音が聞こえることもあって」

「……それって、中から何か飛び出してくるような音？」

「はい。え？　千波さんも聞いたことがあるんですか？」

舞美さんの問いかけに、千波さんは返事をしなかった。心なしか、顔が青ざめている。

「他の娘も何人か、そんなのを聞いてて、怯えてるんですけど……どうしましょう？　お祓はらいとかしてもらったほうが」

「……こんど気が付いたとき、知らせてくれませんか？
舞美さん」

「え？ あ、はい。いいですけど……」

重く真剣な口振りに気圧されて、舞美さんはたじろぎながら頷いた。

舞美さんはあとで知ったのだが、彼女が働く前にこの店はいちど、ひとりの熱狂的な「ご主人様」の襲撃を受けていた。

その「ご主人様」はひとりのメイドに執心したが、メ

イドには分を超えた関係を結んではいけない、という不文律がある。かの「ご主人様」もそれを承知していたから、思いつめるあまり、閉店後の店内に侵入して待ち伏せ、無理心中を図ったのだという。

しかし、「ご主人様」が懸想^{けそう}していたメイドは、偶然にもその日、臨時の休みを取っていた。幾ら待てどもご寵愛のメイドが現れない苛立ちに、「ご主人様」は潜伏していた物置から店内に飛び出し、用意していた灯油を被って、自分の身体に火を放った。

幸いに怪我人は出なかったが、店の内装はほとんど焼

け落ち、営業を続けられなくなつた。問題の「ご主人様」に目をかけられたメイドだけでなく、他の娘たちも他所の店に移るか、職を改めることになつた。

紆^う余^よ曲折あつたが、焼失した店は内装も店名も変えて、ふたたびメイドカフェとして営業を始めることになつた。従業員もほとんど新顔に入れ替わつたが、ただひとり、千波さんだけはオーナーたつての頼みで呼び戻された。新人たちの教育係に見込まれた、というのもあるが、それ以上に千波さんの折り目正しい「ご奉仕」ぶりに、オーナーはじめ多くのご主人様が魅せられており、復帰を望

まれていた。別の場所でメイドを務めることに抵抗があつた千波さんも、そういう話なら、と再びエプロンに袖を通したという。

もつと怖いことが起きるのでは、という不安を抱えて、舞美さんはその日も「ご奉仕」に励んだ。

他のメイドたちとステージに立って、ちよつとした芝居をかけているうちに、次第に集中が高まってくる。いつしか周りが見えなくなっていた、その油断を衝くように、気配は突然訪れた。

同時に、同僚たちも微かに息を呑み、互いに顔を見合
わせる。既にメイド仲間たちのあいだでは噂になってい
たから、体験していた者もしていなかった者も、多かれ
少なかれ意識していたのだろう。

事情を知らないはずのご主人様がたも、にわかには浮き
足立ったメイドたちの様子に戸惑いの表情を覗かせてい
た。何人かは目には見えない異変も感じているようであ
る。眉をひそめる顔もちらほらと窺うかがえる。

低く怯えたどよめきが店内を満たす。舞美さんは焦り
を覚えた。これは、よくない。ここはご主人様にくつろ

いでいただく場所なのに、ご主人様を脅かし、不安を与えてしまっている。

どうしよう、でもどうしたらいいんだろう。

こんな事態に対応するマニュアルなんて知らない。そもそも、誰か正しい対処の仕方が解るんだろうか？ たとえ千波さんでも、きつとこんな経験は……。

そこで舞美さんは初めて、千波さんが動いていたのに気づいた。いつになくぎこちなく、慎重な足取りでステージを降りる。ご主人様たちとメイドたちの視線を浴びながら、千波さんは焦げた匂いが溢れだす空間の手前で足

を止めると、恭しく頭を垂れた。

「お帰りなさいませ、ご主人様。長らくお見限りでしたが、いかがお過ごしでしたでしょうか？ 先だってお帰りのご様子でしたが、気づかずお迎えが遅くなりましたこと、お詫び申し上げます」

どよめきが静まり、店内の誰もが固唾を飲んで、千波さんを見つめている。いつもと変わらず端然と佇んだ千波さんは、軽く首を傾げ、いたわるような微笑みを浮かべて言葉を継いだ。

「恐れながら、お装いが乱れていらっしやるようござ

います。どのようなお姿でも、私どものご主人様には違いありませんが……以前は身づくろいを気遣われていたことをご存知ない皆様に、誤った印象をお与えになるのは、メイドとして大変心苦しく思います。

あいにく、こちらにはお召し替えいただくものの用意がございませんが、せめてお身体だけでも清めていただければ、私どもも安心です。どうぞ、あちらでお身体を流していただ」

千波さんが従業員通用口のほうを、手首を返し示した途端にフロアを、透明の靴底が叩く音が確実に、千波さ

んの示したドアへと猛スピードで駆け抜けた。文字通り見えない何か^{何か}がドアをすり抜けたかのように、足音が向こうへ吸い込まれると、ロッカーの金属製の扉がけたたましく開かれ、叩きつけられるように閉じられる音が立て続けに響いた。

しばらく、誰も口を利かなかつた。気の抜けたような溜息が、低いうねりを奏でる。

「……帰った？」

「……帰った、ね」

舞美さんが間近の同僚と囁き^{ささや}を交わすと、店内のあち

こちらから似たような言葉が幾つもこぼれた。緊張が解れる。頬が緩むのを感じながら、従業員通用口から千波さんのほうを振り向いて、舞美さんは呆気に取られた。

千波さんが、床に座り込んでいる。

絶句した舞美さんに一瞬惚ほつけた顔を見せたが、すぐにはっ、と息を呑むと、千波さんは腰を浮かせた。

「は、はうっ……!!」

しかし、いつになく締まりのない声を漏らすと、へにやり、と尻餅をついてしまう。そして、四つん這いになると、ばたばた手足を漕いで、さっきの「ご主人様」に続くよ

うに通用口に飛び込んでいった。

「……千波、さん……」

結論から言えば、あれで怪異が収まったわけではなかった。そのあとも、ロッカーから何か飛び出してくる音がしばしば聞こえてくるし、ステージの片隅からは焦げ臭い匂いときおり漂ってくる。

だが、以前と比べれば回数は減り、メイドたちが怯えることはなくなった。今でも驚くのは、千波さんしかない。

いつしかこの店は、ときおり不可解な物音や異変が起きては、そのたびに腰を抜かす千波さんの姿が、名物のひとつになつていた。

それでも普段は凜りんと振る舞い、腰を抜かしながらも懸命に虚勢を張る千波さんは、舞美さんからも他のメイドたちからも、無論たくさんの“ご主人様”たちからも愛されている。

ぼくは小さい胸が好きなのです

お兄ちゃんのバカア

本書の続きを、 読みたいですか？

竹の子書房文庫は、読者の皆様のご意見・感想を糧に、ニヨキニヨキと成長します。タイトルだけで本文がないページは、目次だけしかなくて、まだ書かれていないのです。もっと読みたい、続きを読みたい、もうやらんでいい、などなど、ご意見ご感想などありましたら、

【竹の子書房】 笑怖箱 怪萌 #tknk

<http://togetter.com/li/41469>

こちらに感想を一言添えて ReTweet してくださいませ。

RT がたくさん付くようでしたら、大慌てで続きを書きます。



※本書は竹書房とは
無関係です。
また著作権は著者各
位が有しています。
商用化される際はお
金下さい。

恐怖箱 怪萌

2010年8月12日 初版発行

2010年9月15日 改訂第四版発行

お兄ちゃん 高田公太、他（執筆）

看守 加藤一（監修）

お姉ちゃん 漆原密花（カバー）

目次出題 雨宮淳司

<http://bit.ly/acKJ9q>

発行人 加藤 一

発行所 竹の子書房

<http://www.takenokoshobo.com/>

製版所 GLG 補完機構